

同人雑誌の全盛期 — 佃實夫はばたく —

徳島にも同人誌の黄金期と呼べる時代があった。昭和36年から52年にかけて、「四国文学」、「徳島作家」、「暖流」という有力3誌があり、同人たちはそれぞれ中央を窺い、熱く競い合っていた。

「四国文学」は昭和36年、悦田喜和雄によって創刊された。悦田は、海部町由岐町木岐（現美波町）に生まれ、農業に従事しながら文学を志し、大正8年、23歳のとき武者小路実篤の「新しき村」に参加した。大正の終わりがら「白樺」などに作品を書いてきたが、中央公論主幹の滝田樗陰に可愛がられ、同誌に作品を発表していた。昭和15年、居住地の由岐郵便局に佃實夫が転任したことからふたりは師弟関係を結び、佃は文学の道に精進する。28年、県立図書館臨時職員になったが、まもなく四国文藝懇話会を組織し、悦田喜和雄を会長に据える。翌年には機関誌「四国文学」（後に、悦田喜和雄主宰の四国文学会発行となる）を創刊し、作品をつぎつぎ発表する。



悦田喜和雄



53歳の佃實夫

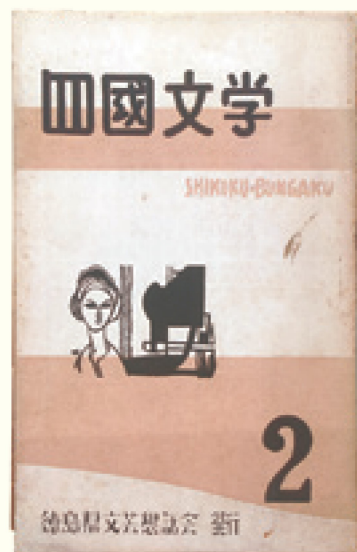
候補となった。悦田は徳島に在住し「四国文学」を育てたが、佃は中央へ出てプロ作家へ転身、目覚ましい活躍をすることになる。モラエスの生誕百年祭の時に『モラエス案内』を編集したこと、モラエスに強い興味を持ち研究を続け、それは終生のテーマとなつて「わがモラエス伝」を生み出す。その後、集英社版『定本モラエス全集』全5巻の刊行へと繋がっていく。44歳の時には、モラエスへの功績が評価され、ポルトガル国よりインファンテ・ドン・エンリッケ勲章を大佛次郎・井上靖・遠藤周作らとともに受賞することになった。39年、横浜に移住、中央作家の仲間入りを果たした。思想の科学研究会会長を務めたり、ドキュメンタリーや文献探索などのビジネスマン向けの本を書いたり、文学以外の分野でも大いに活躍した。師に先立ち

昭和54年、クモ膜下出血で急逝した。53歳の働き盛りだった。悦田喜和雄は58年に死去。

「徳島作家」は、「四国文学」

に遅れること4年。昭和33年産声をあげる。四国放送で帯ドラマを書いていた田中富雄は、JR作家クラブを発足させ、ラジオドラマの勉強をはじめようと書き手を集めていた。そこへ田中富雄と交友関係にあった印刷出版業の株式会社出版の井上銀晴社長によって好意の手が差し伸べられ、経費丸抱えて同人誌を発行してくれるという幸運に恵まれる。クラブのメンバーが横滑りして同人になり、切磋琢磨して創作が続けられる。ここから芥川賞候補作や直木賞候補作が生まれ出るのである。主宰田中富雄の死去によって平成18年終刊となった。58号まで出た。

「暖流」は、昭和36年、作家貴司山治が私費を投入して創刊した同人誌である。徳島の人たちに中央で活躍するような作家が出現してほしいとの思いからであった。翌年の「暖流」に発表した岡田みゆきの「実験観察記録」が新潮社同人雑誌賞候補となった。また、38年には、丸川賀世子（敏子）の「巷のあんばい」が第6回婦人公論新人賞を受賞した。40年、中川静子が6号に発表した「白い横顔」が第53回直木賞候補となった。その「暖流」も、昭和58年貴司の死去により資金が尽き廃刊となった。17号まで刊行された。（丁山俊彦）



「四国文学」第2号